

掃除屋本舗―サンプル―

「痛いっ……もう無理っ……もうっ……」

前屈みになり、ズボンの前立てを押さえ込む。しかし、金属が邪魔してペニスに触れることはできない。

「ううう……痛い……」

カレンダーを見る。花丸がついた日まであと三日。三日後には、この痛むペニスを解放することができる。そして初めて他人の手に触れてもらうことが――。

(三日……)

ここまで一か月我慢した。残りはあと三日。しかし、三日もある。もう、勃起と射精のことしか考えられない。

「痛い……」

この数日、もう興奮なんて関係なく、ペニスはいつでも勃起しようとしていた。金属が食い込み、激痛をもたらす。それなのに、その痛みでは萎えることがない。

「うう……」

ズボンと下着を脱ぎ捨て浴室に入る。そして、冷水。

「ああああっ」

刺すような冷たさだ。でも、そのおかげでペニスは形を戻した。

「あと三日……」

あと三日で、貞操帯に阻まれたこのペニスの亀頭をきれいにしてもらうことができる。金属の隙間からタオルを差し込み、水滴を拭いた。

『掃除屋本舗』と書かれた看板を見上げ、店内に足を踏み入れた。

やっと、やっとだ。利用を二十歳以上と規定するこの店に、ようやく来ることができた。

「いらつしやいませ」

「あの……よ、予約を……」

思っていたよりも明るい店内。それにまるで新築のようにピカピカで掃除が行き届いた廊下には渚よりも大きな観葉植物が置かれていた。

「ご予約いただいた際のお名前をお伺いしても宜しいでしょうか」

「あ……な、ナギです」

「ナギ様ですね。本日は陰部のお掃除ですね。ボーイは来店いただいてからお決めになるこのことでしたが」

「は、はいっ……」

恥ずかしい。この受付ホールには他に誰もいないけれど、やはり自分の趣味を音で聞くと

いうのは耐えがたい。しかし受付の男性は慣れているのか、淡々とした調子で「こちらの中からお選びください。写真の隣に記載されているのはプレイ傾向です」と言ってファイルを開いた。

カウンターに歩み寄り、開かれたファイルを覗き込む。そこには男性の名前と年齢、顔写真と下着一枚の身体の写真。それから例えばページ目の人だと『ハードSM。鞭、ろうそく、奉仕指南……』といやらしい単語が並んでいる。

あまり怖くない人がいい。というか、穏やかで優しい人がいい。次、次、とまずは顔写真で性格を判断していくと、最後のページの人が目に付いた。男らしいのに、どこか雰囲気は柔らかい。そして、写真だけでも緊張してしまうほどタイプだった。

「あの……この方は……」

「ああ、大吾ですね。精悍な見た目ですが内面は優しいタイプです」

「じゃあこの方をお願いします」

料金を払うと、受付は受話器を上げた。恐らく呼び出すのだろう。緊張する。

「ではお部屋のご案内致しますので少々お待ちください」

後ろを振り返ってもベンチはない。待っている間に他のお客さんと顔を合わせたら嫌だな、と俯いていると、すぐに落ち着いた低い声が聞こえた。

「お待ちせ致しました。ご案内致します」

「あ……」

大吾と呼ばれた人かと思ったけれど顔が違う。この人はきつと案内役の人なのだろう。ちらりとカウンターを見ると受付のお兄さんが「お楽しみください」と素敵な笑顔で見送ってくれた。

「お部屋はこちらです。すぐに大吾が参りますのでどうぞおくつろぎください」

部屋の中はまるでラブホテルのようだった。大きなベッドにテーブル、その前にソファ。シンプルで、余計なものは置かれていない。と言ってもラブホテルに行ったことなど一度もないのだけれど。

（お風呂もあるのかな……）

なければ陰部の洗浄をしてもらうことはできない。もし部屋を間違えられていたらどうしよう——そう思い部屋の角にあったドアを開けるとそこは洗面所だった。その奥にまたドアが二つあったので、おそらくトイレと浴室だろうとあたりをつける。

コンコン——。

「あれ？」

「あつ」

ノックの直後に聞こえた声。急いで部屋に戻ると、先程ファイルで見たよりも整った顔立ちの男性がいた。

「あ、よかった。迷子になったのかと思った。初めまして、大吾です」

「あつ、えつと……あの、ナギ、です。宜しくお願致します」

ガバツと下げた頭に、大きな手の感触。優しくふわつと撫でられた。

「宜しく。緊張しないで。まずはゆっくりお話しようか」

「あ……」

どうしたらいいのだろう。こういうお店に来たのは初めてだし、よく分からない。

「おいで」

でもその声が安心感を与えてくれて、だから手を引かれるがままベッドに座った。

「抱っこしようか」

恥ずかしい。初対面なのに足の間に座るなんて。

「お邪魔します」と挨拶をして、導かれるまま横向きに腰を下ろす。

「緊張してる？」

「は、はいっ……」

近い。こんなに人とくっつくのなんて初めてだ。ドキドキして、この心臓の音が聞こえてしまうのではないかと不安になる。

「大丈夫、怖くないから」

「はい……」

恐怖心を抱いている、ということはない。受付の人も案内の人も、ほとんど一瞬しか会っていないようなものだけれどとても優しい印象だった。もしこの大吾という人が何か手荒なことをしたとしてもすぐに助けしてくれるだろうし、この人自身もとても優しい人に見える。

「ナギくんって呼んでいい？」

「は、はいっ。あの、えっと……」

「大吾でいいよ」

「大吾さん……」

大吾は清潔感のあるスポーツマンタイプだった。写真よりも少しごつい。でもスーツを着ているせいか営業マンにも見える。話し方も優しく人見知りもないようだし、会社にいたらエリート営業マン、みたいな感じだろうか。

「ん？」

「あ、い、いえっ」

つい観察してしまっていた。慌てて顔を下に向ける。

「可愛い。小動物みたい。俺が狼に見えた？」

「あつ、や、その、サラリーマンみたいって……その、」

失礼だっただろうか。もし恋人ができるならサラリーマンがいいな、なんてただ漠然と、でも以前から思っていたのでつい言ってしまったのだけれど。

「……分かる？」

「え？」

「俺、サラリーマンなんだよね」

「そ、そうなんですか？」

「そう。営業」

「え！」

まさか本当にそうだとはい。当たって嬉しい。それにプライベートなことを教えてもらえた。「普段はね。たまにこうしてここに来てるけど」

「そうなんですネ」

ナギくんは鋭いね、観察力があるんだね、と大吾は何度も頭を撫でて褒めてくれた。そんなことをされたのだから初めてで、またそれにドキドキして。嬉しくなって、そうしたら、たったそれだけでペニスが疼いた。

「う……………」

「ん？」

「あ、いえつ……………」

横向きの体勢のせいで、下を向けば一人で興奮しているのがバレてしまう。大吾は全く勃起していないというのに。恥ずかしくてバレたくなくて、誤魔化すようにもぞもぞと足を動かす。するとずつと顔から視線を背けなかった大吾が口角を上げ、下を向いた。

「おちんちん、起っちゃった？」

「あ……………」

カアツと顔が熱くなった。恥ずかしい。バレた。

「いいんだよ。ナギくんがエッチな子つてことはもう分かってるから」

「あ……………や……………そんな……………」

こういう店に来ている時点でいやらしいことが好きというのは想像がつくのもかもしれない。でも、ここに来た目的は「亀頭掃除」としか伝えていないというのに。

「ナギくんは今日、おちんちんを洗ってほしいんだよね」

きちんと答えなくてはいけない。そう思うのに、恥ずかしさのあまり声が出せない。

「……………可愛い。でもお返事しないと嫌なことしちゃうかもしれないから。ね？ 頷くだけでもいいよ」

優しい声。きつと、これは仕事上必要なことなのだ。申し込みのときに伝えただけじゃなく、対面でのプレイ内容の確認。

「ナギくんのエッチなおちんちん、綺麗にしてほしい？」

「ん……………」

目をぎゅつと瞑り、小さく頷く。たったそれだけでまたペニスが疼く。

「ナギくん、すごく可愛い。おちんちん、見せてくれる？」

「あ……………や……………」

嫌なんて言ったら綺麗にしてももらえない。プレイに入れないと大吾も困る——分かっているのに、どうしても羞恥心が勝ってしまう。

（他の人にすればよかった……………）

こんなに好みの人じゃなくて、もう少し好みと外れた人にしたらよかった。そうしたらもう少し冷静でいられたはずなのに。

くくくく

「……おちんちんについている痕は？」

「あ……」

まさかそんなところにまで気付くなんて。

「これは……どうしたの？」

心配そうな声。いや、困惑だろうか。そっと伸ばされた指先が、ペニスについた線をなぞる。

「……それ、は……」

恥ずかしい。やはり来るべきではなかった。

「……お話、してくれたら嬉しいけど。でも、言えなかったらいいよ。水や石鹼が沁みることはない？」

「……それは……貞操帯、の……痕……です……」

言いたくなかった。恥ずかしくて爆発してしまいそうだった。でも、痕を気にしてくれる様子がとても優しく。本当に心から心配してくれているみたいで。別に誰かに暴力を振るわれたというわけでもないのに、隠したらそう誤解させて、そしてまた更に心配をさせてしまう気がして。

(あ……でも別に……心配なんて……)

きつと大吾が気にしているのはこのペニスについたいくつもの線が仕事に影響しないかというただけだろう。でも、いい。もう言ってしまった後なのだから、そんなこと今更気にしても仕方がない。

「……貞操帯」

「……はい……」

「今はしていないね？」

「邪魔……かな、と思って……」

本当は貞操帯をしているところを見せるのが恥ずかしかったのだ。でもそんなことは言えないから、ついそれっぽいことを言ってしまう。

「そう……つてことは、ナギくんが自分で管理しているんだね？」

「っ……！」

そうだ、確かに今のはそうだと分かってしまうような発言だった。もう、どうにもできずに顔を手で覆う。

「ううう……」

「可愛い。まだ子供なのに、そんなエッチなことをしてるんだ」

大吾がそっと、包むようにしてペニスを握った。

「あっ……」

「いつから貞操帯を？」

「い、今は……一か月前……」

「初めて貞操帯をしたのは？」

「二年くらい……」

つい濁してしまったけれど、本当は正確に分かっている。十八歳の誕生日を迎えて、そういうお店の利用が解禁になって、それですぐに注文をした。さすがに店舗に入る勇氣はなかったのだ、ネットで。そしてそれからずっと、限界を迎えるまでは貞操帯をつけっぱなしにして、頭がおかしくなりそうになってようやく一度だけ射精を許す、ということを繰り返してきた。

「二年も……だから痕が残っちゃったのかな」

「あつ……」

すり、と大吾がペニスを撫でる。気持ちいい。他人の手がこんなに気持ちいいなんて。

「どれくらいのペースで射精を？ それともまだ子供だから射精なんて知らないかな」

くすくすと笑いながらの質問。遊ばれているみたいで、昂っていく……。

「しゃ……射精は……」

さつきまでは簡単な質問に答えるのも恥ずかしくてできなかったのに、いつの間にかもう大吾のペースにはまっついていて、答えればもっと恥ずかしくてもっと気持ち良くて、もっと可愛がってもらえる、と知ってしまった。

「二か月くらい、です」

「二か月もつけたまま？」

「はい……」

「そう……じゃあ射精するときは握っただけで出ちゃったりするんじゃない？」

我慢強い子だね、と大吾がペニスに話し掛ける。

「あ……いえ……握らないので……」

「握らない？」

ああ、ダメ。これ以上いやらしいことを言っただけでも、知ってほしい。大吾が想像している以上にいやらしい子なのだ、ちゃんと知って、虐めてほしい。優しく甘やかすように虐めてほしい。

「手ですると、おちんちんが……その……気持ちいいのを知っちゃうから……」

「じゃあどうやって出すの？」

さつと手が離れた。せつかく撫でてもらっていたのに——でも、普段触らないのだと言えば確かに触ったらまずいと思ってもおかしくはない。

「あの、おちんちん撫でて……」

「いいの？ 気持ちいいこと、おちんちんが学んじやうよ？」

「ん……そつと……」

いいのだ。だって、自分の手じゃないから。自分の手なら、意思が弱ければいつでも触ってしまえる。でもペニスが覚えたのが大吾の手なら、それは簡単に得られるものじゃないから。

「うん、じゃあもしイっちゃいそうになったら言ってね」

すり、と大吾がペニスを撫でた。むくむくと完全に大きくなると今度は裏筋を優しく撫で

上げてくれる。

「ああ……」

「おちんちん、気持ちいい？」

「はい……すごい……」

触るか触らないか……本当に軽いタッチなのにすごく気持ちいい。これが久しぶりの手の感触。初めての他人の手の感触——。

「それで？」

「え？」

「貞操帯を外して、おちんちんを気持ち良くさせてあげるときはどんな風にするの？」

「あ……」

そうだった。そんな話をしていたんだった。

「あの……ふ、布団、を……」

恥ずかしい。

「布団？」

「布団を……抱きしめて……」

もうこれ以上言わせないでほしい。もう分かっているのだから、そのまま察して頭の中で処理しておいてほしい。

「……抱きしめるって、こんな風に？」

「あつ……」

覆い被さるように抱きしめられると、言葉にならないほど緊張した。だって、まさか抱きしめられるなんて。

「俺のことを布団だと思ってしてみて」

「あ、や……」

違う。こんなんじやできない。だって普段は布団をぎゅっと抱き込んで、下半身を押し付けるようにして腰を振って射精するのだ。しかも布団を汚してしまわないように着衣のまま。下着とズボン、二枚も邪魔なものがあるというのに敏感なペニスはそれでも簡単にイッてしまう。イッたらまた貞操帯に閉じ込められてしまうから、少しでも長く気持ち良くなりたいのに、イかないぞ、まだイかないぞ、と思いつながら勝手に出してしまうこともある。そんなときはなんだかイったようなイっていかないような何とも言えない感じがして全くすつきりしなくて。気持ちはいっていかないのに身体はイってしまったような。でも一度だけと決めているので、そんなときはもやもやしたまま、涙を堪えてペニスを貞操帯にしまっていた。

そんな生活を、もう二年。

くくく

二か月後。

「ああ……」

もう何をしていてもペニスが痛む。あまりにも勃起が多く、ペニスの痛みが酷かったので二週間前に薄いガーゼのハンカチを強引に貞操帯の中に埋め込んだ。それを出す際にはペニスを擦って痛いくらいに感じてしまったけれど、日常生活の中であの激痛に耐えることはできなくて。本当は今日はハンカチなしで行きたかったけれど、やはり勃起すると痛くて涙が出そうで。このままだとお店にも辿り着けないような気がして、仕方なくガーゼを挟んで家を出た。

大吾の勤めるお店まで家から電車で三十分。椅子の空きはあったけれど、落ち着かなくてドアの横に立ったまま窓の外を眺めて過ごした。

(あと十五分……)

予約の時間はもうすぐだ。自分で予約したわけではないけれど、大吾が入れておいてくれると言っていたので大丈夫だろう。でも、前は前日に確認のメールがあったのに今回はなかった。それだけが少し心配だったけれど、前は初めての利用だったから確認が来たというだけかもしれない。

(まさか忘れられてたりとか……)

その不安は何度も頭を過った。でも日にちも時間も大吾から提案してくれたのだから、忘れられているということはないだろう。

改札を出て、お店に向かう。徒歩で約五分。内容があれなので、少し早めに着いて体温を落ち着かせてから入りたい。

店の一階のコンビニに入る。一番安いお茶を買って、店の前で一口。すると、大吾に似た人がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

(わ……そっくり……)

でもあと十分もない。さすがにこんなところにいるはずがないだろう——そう思ったのに、その大吾似の人はこちらに向かって歩いてきた。

「ナギくん」

「あ………だい、ごさん……?」

「うん。久しぶり」

「あ、えっと、お久しぶりですっ」

まさか本当に大吾だとは。店内で会うものとはばかり思っていたから心の準備がまだできていない。

「あ、あのっ、あっ、えっと……」

「可愛い」

「っ………!!」

ここは外だ。人の往来のあるコンビニの前。こんなところで「可愛い」なんて。

「行こうか」

「え? あ、はいっ」

歩き出した大吾に続く。しかし、大吾はなぜかそのまま道を進んでしまった。

「あ、あの、大吾さんっ」

「……ごめんね」

「え？」

一体どうしたのだろうか。お店はこの建物で、入り口はもう過ぎてしまった。なのに、大吾はそのまま歩き続ける。

(どうしたのかな……)

スタッフだから裏口から入る、とかだろうか。謝った理由は遅刻したとか？ でも別にそれくらいで怒ったりなんてしない。

「……こっち」

けれど、どうやらそのどちらも違うようだった。途中細い道に入ると、連れて行かれた先はコインパーキング。満車のそこで、一台の黒いステーションワゴンのライトが光った。

「あ、あの」

「俺の車」

そうだろう、とは思った。でも、一体どうして。

けれど訊くよりも先に大吾は車に乗ってしまった。そして、少しだけ前に進む。

「乗ってくれる？ 怖いことはしないから」

そんなこと、されるとは思っていない。でもどうしてお店じゃないのが気になってしまつて。でも大吾が運転席に乗ったままでは話もできない。別に、拉致されるとか殺されるなんてことはないだろうと助手席に乗り込んで尋ねる。

「あの、どうしたんですか？ お店は……」

「ごめん、言わなくて。店、辞めたんだ」

「え……」

もし、それが本当なら、こんなところで会っていいのだろうか。だって、これでは大吾の利益にならないだろう。

「シートベルト、してくれる？」

「あ、はい、すみませんっ」

慌ててベルトを引っ張るけれど、焦ったせいなのか、ブレーキがかかってしまって上手くシートベルトを締めることができない。何度弛ませ引っ張り直しても、がつんがつんと止まってしまう。

「貸してごらん」

優しい言い方だった。さっきまではどこか冷めた感じ——いや、緊張しているようだったけれど、今の声は二か月前に会ったときの声と全く同じ。

「すみません……」

大吾に任せると、シートベルトはすんなりと嵌った。

「本当は連絡したかったんだけど、連絡先交換は禁止されて」

「あ、そう……ですか。そうですね、普通」

何も知らないくせに知ったかぶりをした。でも、知らないと素直に言うのも純粹ぶつてる

と思われるんじゃないかと思ってしまった。

「だから、本当は店の予約入れてないんだ、ごめんね」

「あ……いえ、いいんです。えっと、じゃあお金、」

元々お店に払う予定だったお金を全て大吾に渡すことができる。お店に渡る分がなくなるので、大吾にとってもラッキーだろう。

「いらないよ」

「いえ、でも」

元々お店で会う予定でいたのだ。お金を払わなければ、会ってもらう理由がなくなってしまふ。

「それより、俺の家でもいい？」

「え？」

「おちんちん、綺麗にしてたくさん褒める約束」

「あ……いい、ん、ですか……？」

もう仕事を辞めたのなら、してもらう理由がない。しかもお金をいらないと言われてしまつては。

けれど大吾はぐしゃぐしゃと頭を掻いた。そして困ったように笑つて言う。

「……そんなに言われるとちよつと凹むなあ」

「え？」

「お金はいらないし、約束の時間に会えるように行つた。それで、家に連れて帰りたいって言つて、おちんちんを可愛がりたいとも言ふ。……意味、分かる？」

~~~~~

包皮輪に電動歯ブラシの先、ガーゼが触れた。そして、ゆつくりと中に入つてくる。

「ああっ！ 太いっ……」

きつい。感じる軽い痛み。でもその痛みによってペニスが萎えたことで、そこは逆に異物の侵入を許してしまった。

「ああああ！」

皮が、ガーゼ棒のあるところだけ伸びきっている。引き攣る感覚。でも痛みはなくて、むしろいつスイッチを入れられてしまうのかとドキドキして。

「うん、ちゃんと入つた。少し太いかなと思つたけど大丈夫そうだね。じゃあ、少しずつ擦つていくよ」

「あ……あ……」

怖い。怖い怖い怖い。

「やつ、こわいっ」

「大丈夫。ちゃんとぴかぴかにして、それでおまじないをして抱っこしようね」

「あ……」

ずるい。このタイミングでそうやってご褒美をちらつかせるなんて。

「あと一週間だよ。たった一週間。その間にどうやって射精するか考えようね」

話は終わり、とでも言うかのように、挿し込まれたままのガーゼ棒が横に動いた。

「あああああああ！」

手動だった。でも、気持ち良すぎて。だってそれでも敏感な亀頭なのだ。さらに真性なので普通の人よりもっとと敏感。そこをガーゼで擦られる。

「あああああああああああ！」

音はしない。でも、的確にガーゼが亀頭を擦る。恥垢を擦り取ろうとしている。

「あああああああああ！ ああああああああ！」

包皮内が狭いせいで動きは細かい。しゅ、しゅと亀頭が小刻みに擦られる。

「ああっ！ あああああ！」

「可愛い……お掃除気持ちいいね」

「ああああっ！ あああああ！」

（もうだめっ、もうっ——！）

「ひぎいいいいああああ！」

突如震え始めたソレ。人間にはなし得ない動きが亀頭を責める。

「すごい……これなら簡単に綺麗になるね。まずは亀頭を一周しよう」

エロメインで5万5千文字です。

宜しくお願い致します。

gooneone